

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 5 月 27 日現在

機関番号：85502

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23520414

研究課題名(和文) ファシズムとの関連における A. ボイムラ の思想に見られるドイツ的特質の研究

研究課題名(英文) a study of German Elements in the Thought of Alfred Baeumler with regard to Fascism

研究代表者

中島 邦雄 (nakashima, kunio)

独立行政法人水産大学校・その他部局等・教授

研究者番号：00416455

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000 円、(間接経費) 840,000 円

研究成果の概要(和文)：A.ボイムラーは、カントとヘーゲルの研究者として啓蒙主義的な立場から出発し、後にバッハオーフェンの『母権制』評価の口火を切る一人となったが、その後ナチスに荷担しファシズムの思想を展開した。このような最初とは正反対の立場への思想の変遷がなぜ、どのようにして生じたのか？「序文」にみられるヘーゲル的・啓蒙主義的な歴史観と矛盾しながらも並存するプレ・ファシズムの思想のありようを、神話学、文学、言語学、フェミニズムの観点から分析することによって明らかにした。

研究成果の概要(英文)：Alfred Baeumler started his research career as a specialist of Kantian and Hegelian philosophy, taking an enlightening position. He was one of the first few critics to reevaluate Bachofen's "Mutterrecht". However, he later joined Nazi Party and developed fascist ideas. What brought about this radical change in his political view? Why and how did he take the position he did, which was diametrically opposed to the position he had taken before? Our analysis of Baeumler's preface entitled "Bachofen. Der Mythologe der Romantik" to Bachofen's work has made it clear that his radical change originates in his pre-fascist ideas which coexisted with his Hegelian ideas despite their mutual contradictoriness. The results of our research suggest that our modern thinking may not be completely free from the magical charm of Alfred Baeumler's contradictory thought.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：独文学

キーワード：独文学 ファシズム ロマン主義 フェミニズム 神話学

1. 研究開始当初の背景

研究代表者は今回の研究以前、平成20年度～22年度に科学補助金(基盤C)を付与され、「ファシズムとの関連におけるA. ボイムラーとトーマス・マンとの比較」(課題番号 20520312)についての研究を行った。

A. ボイムラーはバッハオーフェンの『両洋の神話』への序文「ロマン主義の神話学者バッハオーフェン」によって第一次大戦後のバッハオーフェン・ルネサンスを導いた批評家であり、この序文はTh. マンから非常に面白いと賛嘆されながらも、同時にファシズムの危険性をもつものとして非難され、拒絶された。

研究代表者が以前に行なったこの研究で明らかにしたのは、この「序文」では、古典古代文学論、ドイツ・ロマン主義論およびバッハオーフェン論が展開されているが、本来異質なこれら3つのテーマは緩やかに結合されてはいるものの、全体を通じての論理的一貫性が見られない点である。こうしたルーズな構成のために、A. ボイムラーが従来抱いてきたヘーゲル的な啓蒙主義的歴史観と、彼が初めて展開した後期ロマン主義の民俗学的な成果に基づいた「血と大地と冥府」のロマン主義というふたつの矛盾する考え方が共存することになり、Th. マンは特に後者の傾向に敏感に反応して「序文」を批判したのである。

しかし全体的には矛盾のままにおかれている「序文」の思想的混沌は、実は21世紀の我々と連続している。我々自身の思想的立場を確かめ、将来への展望を開くためにも、たがいに矛盾しながら独自の論理性を通じて展開されるA. ボイムラーの思想を、広い視野から全般にわたって検証する必要がある。そのために、今回の研究ではTh. マンとの関係にしばられていたこれまでの視角の幅を広げ、神話学、ロマン

主義の歴史観と言語理論、フェミニズムの観点から研究し、研究分担者と研究協力者を加えた4名の体制で臨むことにした。

2. 研究の目的

A. ボイムラーの「序文」について、次の観点から分析し、この「序文」のドイツ的特質を明らかにする。

(1) A. ボイムラーによるロマン主義解釈と評価

「ロマン主義とナチズム」との関係はすでに自明のこととされているが、「ロマン主義」の何がナチスに影響を与えたかを、次の二つの観点からボイムラーの論考を通して明らかにする。

文学史的には「ロマン主義」の本流は、ノヴァーリスやFr. シュレーゲルを中心とする初期ロマン主義であるが、A. ボイムラーは、二つのロマン主義運動の間に大きな断絶があるとし、一貫してゲレス、グリム兄弟を中心とする後期ロマン主義を高く評価している。本来は高度に主観主義的運動であった「ロマン主義」がどうして没主体的な歴史主義に転じたのかについて、「ロマン主義」運動の内部にある、連続性と不連続性とをA. ボイムラーの視点を借りて明らかにする。

言語学者J. グリムの思想は現在でもナチズムと結びつけられることがあるが、その原因の一つはボイムラーの「曲解」にある。A. ボイムラーはJ. グリムの思想のごく一部を拡大強調したと思われる。そのような「ずれ」を明らかにして、今日にも続くグリムの誤解を解くことをA. ボイムラーを通して行う。

(2) Th. マンおよびケレーニイとの関連

アポロ的ギリシアの深層にあるもう一つのギリシア文化という点で、神話を通じ

てケレーニイと A. ボイムラーはどちらも、文明の成立以前の不合理な世界を明らかにし、しかも肯定的に捉えている。根底にあるこうした同質性にもかかわらずなぜ一方はナチズムへと、他方はその対極にあるフマニズムスへと思想を発展させることになったのか。二人と書簡を交わし、『ヨゼフ』四部作のなかで二人の理論を受容した Th. マンのあり方を軸に、この点について検証する。

(3) フェミニズムとの関連

ドイツの低い出生率の背後には、西欧と比較してドイツが男性社会的であるという事実が横たわっている。この点に接続しながら A. ボイムラーの「序文」を検討することによって、彼の、母権制仮説に心酔する背景に想定できる、女性性への彼の共感が、女権尊重を欠いた母性尊重に根ざしたものであり、男女役割分担に依拠するナチスの母性尊重や、女性非参画男性中心社会性と整合するものだという仮説を、展開し立証する。

3. 研究の方法

研究は研究代表者 1 名、研究分担者 2 名、研究協力者 1 名の計 4 名による。研究目的を達成するため、4 名は A. ボイムラーの「序文」から自分の研究分野に関連する章や節を分担して翻訳し、この作業を通じて各自の問題意識に応じた「序文」の問題点を確認検討する。年に 2 回研究会を開催し、各自の問題提起を全員で討議する。各自の専門領域に応じた関連文献の収集のために、国内だけでなくドイツへ行き、閲覧調査を行い、入手した文献に基づいて研究する。その成果として、研究期間中に 4 本の学会口頭発表を行い、4 本の学術論文を作成する。

4. 研究成果

研究の目的に従い、4 名の研究者が、互いに連携しながらもそれぞれの立場から以下のような研究成果を挙げた。

(1) 文学史的な観点から、嶋崎順子は「序文」の第 2 章で展開されているボイムラーのロマン主義論に注目し、彼の「ロマン主義的ナショナリズム」の具体相を明らかにすることを目指した。ボイムラーは、バッハオーフェンをゲレス、ザヴィニー、ヤーコプ・グリムを代表者とするハイデルベルクのロマン主義の系譜に位置づけた。その際、彼は、「神話」、「法」、「言語」といった、過去から受け継いだ民族の共通財産にたいするハイデルベルクのロマン主義者たちの畏怖心に基づく宗教的姿勢を高く評価する一方で、Fr. シュレーゲルらを中心とするイエーナのロマン主義の観念論的・美学的・個人主義的観点を厳しく批判し、定説となっているロマン主義の二つの時期への区分を文学史的捏造と呼び、ハイデルベルクのロマン主義こそ改革運動としての真のロマン主義だと主張する。ハイデルベルクのロマン主義にたいするボイムラーの共鳴から浮かび上がるのは彼の全体主義への強い志向であり、「序文」には彼のナチスへの接近が疑いの余地のない形で予告されていることを明らかにした。

(2) 嶋崎啓は、ボイムラーが J. グリムを高く評価するのは、グリムが言語を個人ではなく民族の所産と見たためであり、ボイムラーにとって「民族」は「母」Mutter と同義であったことを明らかにした。そのような彼にとって、グリムが「母語」Muttersprache を賞賛したことは「母」の賞賛と同義であった。しかし実際にはグリムの著作には「母語」の賞賛があるのみで、「母」の賞賛の言葉は見られな

い。ボイムラーにはつねに先に結論があるので、そのように意図的に曲解したり、引用において自分の説に当てはまらない部分を削除したりすることが多い。民族主義者のボイムラーにとっては何よりもグリムが民族主義的傾向を持つことが重要であった。しかし現代の言語学においてもグリムがなお評価されるのは、彼が言語学的述作においては民族主義的志向を極力排除したためである。

(3) 中島邦雄は、ボイムラーとケレーニイの神話学が、当時支配的であったモムゼンの「批判的」な歴史方法論からの象徴解釈による脱却という同じ出発点に立ちながら、ナチスとフマニスムスという正反対の方向へ向かっていった経緯とその理由を、この間に関わるトーマス・マンの発言を手がかりに明らかにした。ケレーニイの神話学の原理であるフマニスムスが相対立する両極のバランスに基づいているのに対し、ボイムラーが神話解釈の客観性を保証するものとして挙げている「深さ」への意志は、神話における「夜と冥府の領域」への耽溺を許す点でファシズム的な「血と大地」の世界を予告しており、この「深さ」への非合理的な愛好にドイツの特質が見取れることを明らかにした。

(4) 島村賢一は、バハオーフェンの『母権制』へのボイムラーによるロマン主義者としての礼賛のなかに、一見して予想される(両性間平等視としての)フェミニズムについて論じ、その礼賛がしかしながら、女性一般から母性中心へと還元してゆくものであり、その限りで、(民族を産出する者としての母という観点で)彼の民族主義が求める反フェミニズム志向と、折り合わせることができたことを示した。合わせて、バハオーフェンの姿勢自体にも、父権制に帰着するべきも

のとして初発の母権制を見るという点での反フェミニズムを、確定した。

また、ボイムラーはその思索の行路においてバハオーフェンからニーチェへとシフトして進んでいると自己理解しているのだが、そのときボイムラーの民族主義への帰着はニーチェによる圧倒的な、民族主義の排除と相いれないはずのところなのであり、本来、矛盾するところだが、そのようなボイムラーの自己理解が、彼によるニーチェへの民族主義視、父権制主義視という錯誤解釈によって成立していることを示した。

バハオーフェンにとっては(オリエントと比べて)父権制が成立した場であったものの、母に限定されることなく女性への尊重の姿勢があったローマ法の下でのローマ帝国であるが、その版図の内部から生まれた諸国と比して、オクシデント内のその外部としてのドイツなどゲルマニアの地においては、ゲルマン法の伝統のもとで、相対的に観てフェミニズム性が弱い、ということとも連動したボイムラーの最終的な姿勢であることを見定めた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 4件)

中島邦雄「アルフレート・ボイムラーとカール・ケレーニイの神話学-トーマス・マンによるバハオーフェンとフマニスムス-」かいろす、査読有、51号、42-64、(2013)

嶋崎順子「ロマン主義とナショナリズム-ボイムラーの「バハオーフェン論」におけるロマン主義観について」かいろす、査読有、51号、65-94、(2013)

嶋崎啓「ボイムラーのヤーコブ・グリム像」かいろす、査読有、51号、95-106、(2013)

島村賢一「バハオーフェンの『母権制』への共感は父権的ナチスの党员としてのボイムラーにおいてどう折り合わされたのか」かいろす、査読有、51号、107-133、(2013)

〔学会発表〕(計 4件)

中島邦雄「アルフレート・ボイムラーとカール・ケレーニイの神話学-深さとフマニスムス-」日本独文学会西日本支部、2013年12月、コンパルホール(大分市)

嶋崎順子「ロマン主義とナショナリズムボイムラーのロマン主義観」かいろすの会研究発表会、2013年3月29日、九州産業大学(福岡市)

嶋崎啓「A. ボイムラーのJ. グリム像」かいろすの会研究発表会、2013年3月29日、九州産業大学(福岡市)

島村賢一「ドイツ文化の類型の一つとして支配系普遍主義を見る可能性」日本独文学会西日本支部大会、2012年12月、福岡大学(福岡市)

〔図書〕(計 0件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年月日:

国内外の別:

取得状況(計 0件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

取得年月日:

国内外の別:

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究代表者

中島 邦雄 (NAKASHIMA, Kunio)

独立行政法人水産大学校・水産流通経営学科・教授

研究者番号: 00416455

(2)研究分担者

島村 賢一 (SHIMAMURA, Ken'ichi)

久留米大学・外国語教育研究所・教授

研究者番号: 60258366

嶋崎 啓 (SHIMAZAKI, Satoru)

東北大学文学研究科・

研究者番号: 60400206

(3)連携研究者

()

研究者番号: